

白杵老舗物語(四)

進取の気質が伝統 久家本店

白杵には、かつて多くの蔵元があった。昭和13年の白杵税務署の資料では、安新II茶屋(市浜)、安東II濱田屋(熊崎)、岡田(一木)、久家II榎屋(横町)、小手川II代屋(浜町)、佐藤II三坂屋(江無田)田中II菊野屋(唐人町)、廣瀬II中屋(平清水)と八つの蔵元の名がある。この中で久家は、この年ダントツの2千7百石(486kl)を出荷している。

しかし、太平洋戦争中の戦時統制で、蔵元は岡田、久家、小手川の三つに集約された。そして、現在は久家本店と小手川酒造野津の赤嶺酒造と藤居酒造の4社が酒造りを続けている。(野津は、合併前三重税務署管内であった)

蔵元の面影を遺していた岡田酒造は、東九州自動車道白杵インターチェンジのために取り壊され、平清水の廣瀬酒造の家屋も昨年取り壊された。

久家家は、江戸時代初期の寛永年間(1624~44年)に、初代仁右衛門が肥前から白杵に移り住んだと伝わっている。当初より横町に住んだようで、糸屋や魚屋を営んでいた。久家家の屋号《榎屋》は江戸時代中期の元禄のころから使われており、この頃横町で酒造りを始めたと思われる。横町の町年寄りを勤えており、可児家(鑰屋)などと共に藩内屈指の豪商に成長したといえよう。藩へ寄付した記録も遺されているという。

幕末の万延元年(1860)、十一代源四郎が末広川沿いの白杵藩の酒造蔵を譲り受け、「日之出鶴」という銘柄の酒を発売した。白杵藩最大の蔵元となった久家家は、この年を創業年としているが、それまでに約

250年の白杵商人の歴史があり、鑰屋や菊野屋に次ぐ創業400年近い老舗である。十二代繁次郎は四十歳代で隠居して、西南の役の明治10年(1877)に生まれた十三代常蔵が、21歳の明治31年家督を継いだ。だが、この年から大正5年までの約20年間は、東京京橋の出店の経営に当たった。この店は、昭和20年に閉店している。



常蔵の時代が 榎屋・久家家の

隆盛期で、大正8年(1920)にその代名詞ともえる「清酒・一乃井手」を発売。一乃井手の名称は、蔵のある末広川一番堰のある地名の通称に因んだ。また他に先駆けて、それまでの樽詰めからビン詰めに変更した。

昭和8年(1933)に、それまでの個人商店を合名会社久家本店と法人化した。12年には白杵税務署管内の納税長者の1位となっている。

特筆すべきは、この年還暦を迎えた常蔵は、祝いの宴に代えて 江戸時代末期に白杵藩の国学者鶴峰戊申が編んだ《白杵小鑑》を、当時白杵中学の歴史教師であった久多羅木儀一郎の協力で復刻発刊したことである。今こそ、個人や企業が周年記念などに文化的な事業を行なうことは当たり前であるが、77年前のこの行為は驚異的な発想といえよう。



現在、久家本店焼酎の代表銘柄《常蔵》にその名を遺し、白杵の大正・昭和期の経済界や文化面での牽引者であった常蔵は、昭和29年(1954)77歳で死去した。後を継いだ十四代源次(大正5年II

1917)は、昭和4年に新設し戦時統制で休止を余儀なくされていた第二工場を復活して増産体制を整えた。この頃から灘などの大手酒造が地方へ販路を拡げて、大分の市場にも浸透して来た。危機感を抱いた源次は、廃業した竹田市の廣瀬酒造の免許を買取り、酒造りの聖地・京都伏見に工場を新設して「清酒・笹泉」を出荷するとともに宝酒造に「桶売り」を行ない、昭和52年にはむぎ焼酎《石仏》を発売し、焼酎市場に参入した。その後、大吟醸酒《慶》や《生酒》の発売など、積極経営を買った。また源次は、家業の傍ら昭和24年白杵信用金庫や51年開場の白杵カントリーの設立に関わり、理事長や会長を勤めたほか白杵商工会議所などの役職を勤め、白杵経済界を主導した。また、県教育委員会委員長も勤めている。

一方、江戸末期から所有する横町の久家の大蔵を全面改装して、外壁に天正少年使用節などを描いたポルトガルのタイル壁画アズレージョを施して、蔵コンサートなどの文化事業の場に供している。



平成10年源次が引退し、15代

容二郎が後を継ぎ、12年の日蘭修好四百年を機にむぎ焼酎をスペイン産の樽で貯蔵し、ドイツ製陶器に詰めた《KUROSHIMA》を、14年には大林宣彦監督の映画「なごり雪」完成に因み《吟醸・なごり雪》を発売するなど白杵のイベントを上手く利用して商品化し地元重視の姿勢を示しているといえよう。



また同年に焼酎の代表銘柄

料パージョンで発売した。前年の13年には、横町の元本店にアンテナショップ「満寿屋」を開店、全商品を展示して試飲と販売を行なっている。

平成16年に容二郎の病氣療養により、大手建設会社の技術者で海外に赴任していた里三が急遽16代を継いだ。翌17年に株式会社を改組。社名を「株式会社久家本店」と改称した。

清酒、焼酎、ウイスキー、ビールなどのアルコール飲料は、2000年頃をピークに市場が縮小を続けて、地方の酒の卸売り会社は大手食品会社に統合される例が多くなった。

チエンスーパーやコンビニは、本部一括契約の流通システムから地元の蔵元の商品を扱うことは不可能で、全国に安定供給できる大手蔵元の銘柄に限られている。

久家本店では、これに対して10年前から県外市場に参入し、全国の酒の専門店と直接取引することで販路を拡げている。さらに数年前から、積極的に香港や東南アジアの見本市に参加して、米食文化の地で清酒やリキュールが好評を得ており、香港やシンガポールで販売店を確保して直接取引を行なうなど、海外市場を視野に入れた経営を進めている。



市内荒田産の 酒米・若水と白

杵の水、白杵の人で造った《特別純米原酒・USUKI》や《焼酎・KUROSHIMA》のローマ字ラベルに、その心意気を感じる。

久家本店の歴史をみると、古くは樽から瓶への転換、「白杵小鑑」の発刊や京都伏見の工場開設、海外への販路開拓など、世代毎に進取の気質に富んで、新たな挑戦をしていると思う。

久家本店の全商品を紹介するには、紙幅が足りない。HPをご参照願いたい。

www.ichinoide.co.jp/ 0972-631-8000 (注:白杵信用金庫は、平成13年に破綻し大分信用金庫に吸収された(文中敬称略/取材・構成:小林)